

# 「進歩主義批判」作法

— 本居宣長の<sup>からざえ</sup>漢才批判から —

宮下英明 著

Ver. 2018-07-27

# 「進歩主義批判」作法

—— 本居宣長の漢才<sup>からざえ</sup>批判から ——

## 本書について

本書は、

<http://m-ac.jp/>

のサイトで書き下ろしている『「進歩主義批判」作法——本居宣長の漢才批判から』を PDF 文書の形に改めたものです。

文中の青色文字列は、ウェブページへのリンクであることを示しています。

# 目次

0 導入	1
0.1 はじめに	2
1 本居宣長の漢才批判	5
1.0 要旨	6
1.1 漢才批判	8
1.1.1 漢才批判の主旨	9
1.1.2 危さ：進歩主義と科学の一緒くた	10
1.2 「本居宣長」の正しい使い方	11
1.2.1 「人情」を、採る	12
1.2.2 「やまとたましひ」（「日本型」）を、却ける	17
1.2.3 「もののあはれ」の捉えを間違わないこと	24
2 漢才批判を数学教育に適用すると	27
2.0 要旨	28
2.1 学校数学への適用は、不可	29
2.1.1 適用：「数学的から数学へ」	30
2.1.2 要件：教員の側の「数学の情」陶冶	33
2.1.3 学校数学は、「数学的」がソリューション	35
2.2 数学そのものへ	38
2.2.1 「学校数学」への拘りを捨てる	37
2.2.2 <おもしろい>	38
2.2.3 数学そのもの	39
2.2.4 「わかる数学」	40
2.3 数学の勉強	42
2.3.1 勉強の普遍形	43
2.3.2 数学が現れる所	44
2.3.3 流しと拘り	46
2.3.4 数学のこころ	47

3 「日本型」を却ける法	51
3.0 要旨	52
3.1 「型」の意味を識る	53
3.1.1 系と型——存在と形式	54
3.1.2 比較：「日本発」	55
3.2 「唯名」を識る	57
3.2.1 ことばに騙される	58
3.2.2 「文化」	59
3.2.3 「俗」	60
3.3 「存在の階層」を識る	62
3.3.1 事物が見える距離——マクロ度	63
3.3.2 「色即是空 空即是色」	64
3.4 「進化」を識る	65
3.4.1 「進化」の概念	66
3.4.2 「古人」は存在しない	67
3.5 「個」を識る	69
3.5.1 個別性	70
3.5.2 成長	71
3.5.3 人物考：「空海」	72
4 備考：「日本型」が言い出されるとき	75
4.0 要旨	76
4.1 「進歩」	77
4.1.1 拝外	78
4.1.2 細工	79
4.2 「日本型」を立てて反発	80
4.2.1 拝外的進歩主義に苛立つ	81
4.2.2 「日本型」を、わざと言う	82
4.3 「日本型」の言論スタイル	81
4.3.1 「和魂」	84

4.3.2 「人情」論 .....	85
4.3.3 アニミズム .....	87
4.3.4 総合主義 .....	89
5 閉じ .....	93
5.1 おわりに .....	94

## 0 導入

### 0.1 はじめに

## 0.1 はじめに

善、倫理、使命、当為、規律、規格を唱える人間・組織は、迷惑である。  
〈員として当然進むべき道〉を立て、「この道を歩め、進め」を迫ってくるからである。

この思考様式を、進歩主義という。

進歩主義とは、このような思考様式を謂う。

進歩主義者にとって、自分と同じような考え方をしない者は、矯正されるべき者である。「この道を歩め、進め」は、絶対である。

「この道を歩め、進め」を迫ってこられたら、どうするか。

伏するのが嫌なら、理論武装の体を示さねばならない。

丸腰は、相手を凶に乗せてしまう。

アナキストが馬鹿にされるのは、丸腰の体だからである。

理論武装といっても、これで戦うのではない。

相手に自分を疎んじてもらうのである。

泣く子と進歩主義者には勝てない。

進歩主義の阻却は、正義の阻却と同じである。

正義を阻却する方法は、「文学」か「科学」と決まっている。

文学は、アンチ正義を立てる。

科学は、正義を解体する。

「保守・復古」——「オリジナル」——は、ダメな方法である。

「オリジナル」の実体が無いからである。

本論者は、以上の内容の論考である。

ただ、これだけではつまらないので、趣向として本居宣長を引く。

本居宣長の場合、「進歩主義」は「漢才<sup>からざえ</sup>」であるが、これを却けるのに「もののあわれ」と「やまとたましひ」が出てくる。

「もののあわれ」は、「文学」である。

「やまとたましひ」は、「オリジナル」である。

というわけで、「文学」と「オリジナル」の両方が揃って、都合がよい。

本居宣長を引くには、併せて、本居宣長をPRしたい気持ちがある。

進歩主義の阻却の論法は、「もののあわれ」論の中に、既にそっくりある。

本論者は、これに、「オリジナル」の考えの阻却を合わせるものである。

「やまとたましひ」は、「漢才」に「日本型」を対置する格好になる。

この「日本型」を阻却する論法を整えてみようというのである。

## 1 本居宣長の漢才批判

1.0 要旨

1.1 漢才批判

1.2 「本居宣長」の正しい使い方

## 1.0 要旨

「日本型」という途方も無いカテゴリーは、独り個人のうちからはとても出せるものではない。

「日本型」を言い出す者は、過去ないし現在「日本型」を説いている某かの<権威>を、心のうちに持っている。

そして、そのような者たちが、互いにもたれ合う格好で、「日本型」を言い出す。

もっとも、基盤は<もたれ合い>であるから、小出しにおそろおそろ言い出す、となる。

このときの<権威>のうち、格別の存在として、本居宣長がある。

丹念な古語研究の上に「やまとたましひ」とか「皇大御國」を言い出すわけであるから、初<sup>うい</sup>学びの者なら「日本型」を信用してしまう。

本居宣長には、学者の面と表現者の面がある。

学者宣長は「もののあはれ」の学者、表現者宣長は「やまとたましひ」の表現者である。

「日本型」の権威の宣長は、表現者の方である。

「表現」は、「嘘をつく」である。

本論考も、確信犯的に「嘘をつく」をやっている。

「表現」は、メタファーである。

真に受けるものではない。

「日本型」は、真に受けるものではない。

そこで、「本居宣長」の正しい使い方を、ここで押さえておくことにする。ただし「正しい」は、「間違いのない」の意味である。

それは、「もののあはれ」を採り「やまとたましひ」を却ける》である。



## 1.1 漢才批判

### 1.1.1 漢才批判の主旨

### 1.1.2 危さ：進歩主義と科学の一緒くた

### 1.1.1 漢才批判の主旨

マンガがおもしろいのは、おもしろいから読むものだからである。  
マンガを読むことが人間形成のためにすることで、学校の科目だったら、  
マンガはつまらないものになる。  
音楽や絵画も同じで、人間形成の科目にされると、つまらなくなる。

なぜつまらなくなるか。

「人間形成」の内容は、「社会要員形成」であり、したがって「キャリアアップ」である。

キャリアアップの目的は、「立身出世」である。

そこで、「立身出世」に対してニヒルになってしまう者には、人間形成科目は無意味なものになる。

本居宣長は「漢才」を批判し、これに「もののおもしろい」を対置する。

ここで「漢才」は、「人間形成」の考えである。

宣長がこの考えから守ろうとしたものは、〈おもしろい〉である。

〈おもしろい〉に真実がある、「人間形成」は嘘だ——これが宣長の思想である。

### 1.1.2 危さ：進歩主義と科学の一緒くた

『古事記伝』一の巻、「書紀あげつらの論ひ」

漢籍カラフミゴコロ心を清く洗サリひ去てよく思へば、天地はただ天地、男女はただ男女、火水ヒミツはただ火水アルカタチんで、おのおのその性質情状はあれども、そはみな神の御所為にして、然るゆゑミシワザのことわりは、いともいとも奇靈クスシく微妙タヘなる物にしあれば、さらに人のよく測知ハカリシルべききにはあらず。

然るを漢国人の癖として、己がさかしら心をもて、萬の理シヒを強て考へ求めて、此ノ陰陽といふ名を作り設けて、天地万物みな、此理の外なきが如く説トキなせるものなり。

進歩主義者は、自分に都合のよい存在論を、科学の趣きでつくる。  
そこで、進歩主義批判は、科学に蓋をするような言辞に陥りやすい。  
宣長は、ここではそうなっている。

科学に蓋をするような言辞を吐くのは、愚である。  
「漢才」批判のこの部分は、他山の石とするところである。

## 1.2 「本居宣長」の正しい使い方

1.2.1 「人情」を、採る

1.2.2 「やまとたましひ」（「日本型」）を、却ける

1.2.3 「もののあはれ」の捉えを間違わないこと

### 1.2.1 「人情」を、採る

本居宣長は、古言を研究し、つぎの主張をする者である：

「万葉集、源氏物語、古事記は、それをつくった心——古人の心——に即して読め」

「いまの学者は儒仏に傾倒した心でこれらを注釈している——それはとんだ料簡違いだ」

この主張は、まっとうである。

実際、これは、人類学や動物行動学が立てている原則——「対象の解釈に自分の規準を持ち込まないこと」——と同じである。

彼の探求の方法論は

「〇〇を理解するためには、(下手でも)自ら〇〇を实践する」であり、これも道理である。

本居宣長『あしわけおぶね排蘆小船』

ヨキ歌ヲヨママト思フ心ヨリ、詞ヲエラヒ意ヲマフケテカザルユヘニ、實ヲウシナフ事アル也、

ツネノ言語サヘ思フトヲリアリノマヽニハイハヌモノ也、

況ヤ歌ハホトヨクヘウシオモシロクヨクヨママトスルユヘ、我實心トタカフ事ハアルベキ也、

ソノタガフ所モスナハチ實情也、

其故ハ、心ニハ悪心アレトモ善心ノ歌ヲヨママト思フテヨム歌ハ、イツハリナレトモ、ソノ善心ヲヨママト思フ心ニ、イツハリハナキ

也、

スナハチ實情也、

タトヘハ花ヲミテ、サノミオモシロカラネト、歌ノナラヒナレハ、随分面白ク思フヤウニヨム、面白ト云ハ偽リナレド、面白キヤウニヨママト思フ心ハ實情也、

シカレハ歌ト云モノハ、ミナ實情ヨリ出ル也、

ヨクヨママトスルモ實情也、

ヨクヨママトオモヘト、ヨクヨメバ實情ヲウシナフトテ、ワルケレトアリノマヽニヨム、コレ、ヨクヨママト思フ心ニタカフテ偽也、サレトモ、實情ヲウシナフ故ニ、アリノマヽニヨママト思フモ、又實情也、

本居宣長『排蘆小船』

題ヲトリテ、マヅ情ヲモトメ、サテ詞ヲトヽノフル也、

コノ時ニアタツテ、情ヲモトムル事、先ニアレトモ、<sup>サキ</sup>ジタイ情ハモトムルモノニハアラス、

情ハ自然也、

タゞ求ルハ詞也、

コノ故ニ、詞ヲトヽノフルガ第一也トハ云也、

本居宣長は、「人情」の肯定を以て、儒教・仏教が立てる「善悪・倫理」を退ける。

「善悪・倫理」を退けるのに「人情」を以てする実践行為を、「文学」と謂う。本居宣長の「人情」論は、「文学」本質論になっている。

## 本居宣長『排蘆小船』

歌ノ本体、政治ヲタスクルタメニモアラズ、身ヲオサムル為ニモアラズ、  
 タ、心ニ思フ事ヲイフヨリ外ナシ、  
 其内ニ 政ノタスケトナル歌モアルベシ、身ノイマシメトナル歌モアルベシ、又国家ノ害トモナルベシ、身ノワザハイトモナルベシ、  
 ミナ其人ノ心ニヨリ出来ル歌ニヨルヘシ、  
 悪事ニモ用ヒラレ、善事ニモ用ヒラレ、興ニモ愁ニモ思ニモ喜ニモ怒ニモ、何事ニモ用ヒラル也、  
 其心ノアラハル所ニシテ、カツソノ詞幽玄ナレハ 鬼神モコレニ感スル也  
 ……  
 タ、善悪教誡ノ事ニカ、ハラズ、一時ノ意ヲノフル歌多キハ、世人ノ情、楽ミヲハネガヒ、苦ミヲハイトヒ、オモシロキ事ハタレモオモシロク、カナシキ事ハタレモカナシキモノナレハ、只ソノ意ニシタカフテヨムガ歌ノ道也

## 1.2.2 「やまとたましひ」(「日本型」) を、却ける

本居宣長は、古道(「やまとたましひ」「皇大御國」<sup>スメラオホミクニ</sup>)を主張する者である。  
 このときの宣長は、表現者である。  
 即ち、わざとこれをやっている。

宣長は、儒仏に傾倒する風潮を批判する者である。

宣長は、儒教・仏教者を嫌う。

彼らを、異文化の規範主義(「道といふ言擧」<sup>ミチコトアゲ</sup>)に倣う者として嫌うのである。

そして、批判の言説をつくる。

このとき、「やまとたましひ」「皇大御國」のことばを効果的なことばとみて、このことばを使う。

使ううちに、ノリで使っていくようになる。

宣長は、論をつぎのように進める：

「物のあはれ」→「やまとたましひ」「神ながら」→「皇大御國」

これは、短絡の論法である。

短絡は、「大勢」の導入のところにある。

「漢才」へのカウンターとして用いられていた「やまとたましいひ」を採用するところが、それである。

実際、批判は、数には数で対抗せねばならない。

「物のあはれを知る心」を、大勢のものとしなければならない。

「大勢」は、「潜在的に大勢」とするのみである。

そこで、「わが国の」を立てる——「やまとたましひ」「皇大御國」。

これは、「日本型」短絡の好例であり、他山の石である。

宣長に対して見るべきは、学者と表現者のダブルスタンダードである。

学者として、「古人の心」を立て、これを探求する。

このときの古人は、特定の古人である。

そして表現者として、「古人の心」を「やまとたましひ」と定める。

古人が、不特定多数になる。

さらに勢いで「皇大御國」までぶっ飛ぶ。

#### 本居宣長『宇比山踏』

さてその主としてよるべきすぢは何れぞといへば、道の学問なり。  
そもそも此道は、天照大御神の道にして、天皇の天下をしるしめす  
道。

……

また件の書どもを早くよまば、やまとたましひよく堅固まりて、漢  
意におちいらぬ衛にもよかるべき也。

道を学ばんと心ざすともがらは、第一に漢意儒意を清く濯ぎ去りて、  
やまと魂をかたくする事を要とすべし。

……

さてまた漢籍をもまじへよむべし。

古書どもは皆漢字漢文を借りて記され、殊に孝徳天皇天智天皇の御  
世のころよりしてこなたは万づの事かの国の制によられたるが多け  
れば、史どもをよむにも、かの国ぶみのやうをも、大抵は知らでは、  
ゆきとどきがたき事多ければ也。

但し、からぶみを見るには殊にやまとたましひをよくかためおきて  
見ざれば、かのふみのことよきにまどはさるることぞ。

此心得肝要也。

……

さて上にいへるごとく、二典の次には万葉集をよく万<sup>ふたふみ</sup>ぶべし。

みづからも古風の歌をまなびてよむべし。

……

すべてみづから歌をもよみ、物がたりぶみなどをも常に見て、いに  
しへ人の、風雅のおもむきをしるは、歌まなびのためはいふに及ば  
ず、古の道を明らめしる学問にも、いみじくたすけとなるわざなり  
かし。

#### 本居宣長『玉勝間』

古今集に、やまひして、よわくなりける時よめる、なりひらの朝臣、

「つひにゆく 道とはかねて聞しかど

きのふけふとは 思はざりしを」

契沖いはく、

「これ人のまことの心にて、をしへにもよき歌也、

後々の人は、死なんとするきはにいたりて、ことごとしきうた  
をよみ、あるは道をさとれるよしなどよめる、

まことしからずして、いとにくし、

たゞなる時こそ、狂言綺語をもまじへめ、いまはとあらんとき  
にだに、心のまことにかへれかし、

此朝臣は、一生のまこと、此歌にあらはれ、後の人は、一生の  
偽りをあらはして死ぬる也」

といへるは、ほうしのことばにもにず、いといたふとし、

やまとだましひなる人は、法師ながら、かくこそ有けれ、  
から心なる神道者歌學者、まさにかうはいはんや、  
契沖法師は、よの人にまことを教へ、神道者歌學者は、いつはりを  
ぞをしふなる

本居宣長『宇比山踏』

すべて神の道は、儒仏などの道の、善悪是非をこちたくさだせるや  
うなる理窟は、露ばかりもなく、たゞゆたかにおほらかに、<sup>みやび</sup>雅たる  
物にて、歌のおもむきぞ、よくこれにかなへりける、

本居宣長『古事記伝』一の巻、「古記典等総論」

さて此記は、字の文を<sup>アヤ</sup>もかざらずて、もはら古語をむねとはして、  
古への<sup>マコト</sup>実のありさまを失はじと<sup>ツロメ</sup>勤たること、序に見え、又今次々に  
云が如し。

然るに彼ノ書紀いできてより、世ノ人おしなべて、彼しをのみ<sup>タフト</sup>尊み用  
ひて、此記は名をだに知<sup>ル</sup>ぬも多し。

其ノ<sup>ユエ</sup>所以はいかにといふに、<sup>カラフミ</sup>漢籍の<sup>マナビ</sup>学問さかりに行はれて、何事も  
彼ノ国のさまをのみ、人毎にうらやみ好むからに、書紀の、その漢  
国の国史と云<sup>フ</sup>ふみのさまに似たるをよるこびて、此記のすなほな  
るを見ては、<sup>マサ</sup>正しき国史の体にあらずなど云て、取<sup>ル</sup>ずなりぬるも  
のぞ。

……

此の記の優れる事をいはむには、先ず上代に書籍と云物なくして、  
たゞ人の口に言<sup>ハ</sup>へたらむ事は、必ず書紀の文の如くには非<sup>ズ</sup>て、  
此の記の詞のごとくにぞ有りけむ。

彼はもはら漢に似るを旨として、其の文章をかざれるを、此れは漢

にかゝはらず、古の語言を失はぬを主とせり。

抑も<sup>ココロ</sup>意と事と<sup>コトバ</sup>言とは、みな<sup>カナ</sup>相称へる物にして、上<sup>ツ</sup>代は、意も事も  
言も上<sup>ツ</sup>代、後<sup>ノ</sup>代は、意も事も言も後<sup>ノ</sup>代、<sup>カラクニ</sup>漢国は、意も事も言も  
漢国なるを、書紀は、後<sup>ノ</sup>代の意をもて、上<sup>ツ</sup>代の事を記し、漢国  
の言を以<sup>テ</sup>、<sup>ミクニ</sup>皇国の意を記されたる故に、あひかなはざること多か  
るを、此の記は、いささかもさかしらを加へずて、古へより云<sup>ヒ</sup>伝へ  
たるまゝに記されれば、その意も事も言も<sup>カナ</sup>相称て、皆上<sup>ツ</sup>代の<sup>マコト</sup>実  
なり。

是<sup>レ</sup>もはら古への<sup>コトバ</sup>語言を主としたるが故ぞかし。

すべて意も事も、言を以て<sup>フミ</sup>伝<sup>フ</sup>るものなれば、書はその<sup>コトバ</sup>記せる<sup>ムネ</sup>言<sup>ハ</sup>辞  
ぞ主には有りける。

又書紀は、<sup>カラフミノアヤ</sup>漢文章を思はれたるゆゑに、<sup>ミクニ</sup>皇国の<sup>アヤ</sup>古言の<sup>ウセ</sup>文は、失<sup>タ</sup>る  
が多きを、此の記は、古言のままなるが故に、上<sup>ツ</sup>代の言の<sup>アヤ</sup>文も、  
<sup>ウルハ</sup>いと<sup>ハ</sup>美<sup>シ</sup>きものをや。

……

かにかくにこの漢の<sup>ナラヒ</sup>習<sup>ハ</sup>氣を洗<sup>ヒ</sup>去<sup>ル</sup>ぞ、<sup>スツ</sup>古<sup>ノ</sup>学<sup>ノ</sup>務<sup>ニ</sup>は有<sup>リ</sup>ける。  
<sup>イニシヘマナビツトメ</sup>

然るを世々の物<sup>モノ</sup>知<sup>リ</sup>人の、<sup>モノシリビト</sup>書紀を<sup>トク</sup>説<sup>ク</sup>るさまなど、たゞ漢の<sup>カザリ</sup>潤<sup>シ</sup>色<sup>ノ</sup>文<sup>ノ</sup>  
みをむねとして、その<sup>コトワリ</sup>義理にのみかゝづらひて、本とある古語をば、  
なほざりに思<sup>ヒ</sup>過<sup>セ</sup>るは、かへすがへすもあぢきなきわざなり。

語にかゝはらず、<sup>コトワリ</sup>義理をのみ旨とするは、<sup>アダシクニ</sup>異<sup>ノ</sup>国<sup>ノ</sup>の<sup>ラシヘゴト</sup>儒<sup>ノ</sup>佛<sup>ノ</sup>などの、<sup>シカ</sup>教<sup>ノ</sup>戒<sup>ヲ</sup>  
の書こそさもあらめ、大御国の古書は、<sup>ラシヘ</sup>然<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>の<sup>シカ</sup>教<sup>ノ</sup>戒<sup>ヲ</sup>をかきあらはし、  
はた物の理などを論<sup>ハ</sup>へることなどは、つゆばかりもなくてたゞ古へ  
を<sup>コトバ</sup>記<sup>ス</sup>る語の外には、<sup>ナニ</sup>何<sup>ノ</sup>の<sup>ココロ</sup>隠<sup>レ</sup>れたる<sup>コトワリ</sup>意<sup>ヲ</sup>をも理<sup>ヲ</sup>をも、こめたるものに  
あらず。

本居宣長『源氏物語玉の小櫛』一の巻

おほかた異國の書は、ひたすら人の善悪是非を、きびしくこちたく論ひ、物の道理をうがちて、さかしげに、人ごとに、われがしこにいひきそひて、風雅のすぢの詩藻のたぐひといへども皇國の歌とはこよなくかはりて、なほ情のおくのくまをばかくして、あらはにはのべず、うはべをつくるひかざりて、とにかくにさかしくつくりなせるを、

皇國の物がたりぶみは、世の有<sup>ココロ</sup>りさま、人の情のやうを、ありのまゝに書出たる故に、大かた物はかなく、しどけなげなる事のみにて、を<sup>ココロ</sup>しくさかしだち、した<sup>ココロ</sup>かなることはなき、これ異國と、つくりやうのかはれるなり、

本居宣長『直<sup>な</sup>毘<sup>お</sup>の<sup>び</sup>の<sup>み</sup>たま<sup>ま</sup>』

スメラオホミクニ カケ カシコ カムミオヤアマテラスオホミカミ ミアレマセ オホミクニ  
皇大御國は、掛まくも可畏き神御祖天照大御神の、御生坐る大御國にして、

大御神、大御手に天つ璽<sup>ア</sup>を捧持して、

ヨロツチアキ ナガアキ アガミコ  
萬千秋の長秋に、吾御子のしろしめさむ國なりと、ことよさし賜へりしまにまに、

アマクモ タニグク スメミマノ オホミラス  
天雲のむかぶすかぎり、谷墓のさわたるきはみ、皇御孫命の大御食

國とさだまりて、天下にはあらぶる神もなく、まつろわぬ人もなく、チヨロズミヨ ミスエ スメラミコト  
千萬御世の御末の御代まで、天皇命はしも、大御神の御子とましまして、

天つ神の御子を大御心として、

神代も今もへだてなく、

カム ヤスクニ タヒラ シロシメ  
神ながら安國と、平けく所知看しける大御國になもありければ、

オホミヨ コトアゲ  
古への大御世には、道といふ言擧もさらになかりき。

ちなみに、学者と表現者のダブルスタンダードは、ふつうのことである。  
——例えばメタ学（「〇〇学」生態学）をやる者の常套である。

## 1.1.3 「もののあはれ」の捉えを間違わないこと

本居宣長『いそのかみのさきめこと石上私淑言』

物のあはれにたへぬところよりほころび出て、おのづからあやある詞が、哥の根本にして眞の哥也。

本居宣長『石上私淑言』

古今序に、やまと哥は、ひとの心をたねとして、萬の言のはとぞなれりけるとある。

此心といふが、則、物のあはれをしる心也

……

事にふれて其うれしくかなしき事の心をわきまへしるを、物のあはれをしるといふなり。

其事の心をしらぬ時は、うれしき事もなくかなしき事もなければ、心に思ふ事なし。

思ふ事なくては哥はいでこぬ也。

しかるを生としいける物は、みな程々につけて事の心をわきまへしる故に、うれしき事も有かなしき事もある故に、哥ある也。

本居宣長『紫文要領』

さて其の歌物語の中にていふよしあしとは、いかなる事ぞといふに、かの尋常の儒仏の道にていふよしあしと格別のたがひあるにもあらねども、おのづからかはる所あるは、まづ儒仏は人を教へみちびく道なれば、人情にたがひて、きびしくいましむる事もまじりて、人

の情こころのまゝにおこなふ事をば悪とし、情をおさへてつとむる事を善とする事多し。

物語はさやうの教誡の書にあらねば、儒仏にいふ善悪はあづからぬ事にて、たゞよしあしとする所は、人情にかなふとかなはぬとのわかちなり。

その人情の中には、かの儒仏の道にかなわぬ事有る故に、儒仏の道にいふよしあしとかはる也。

かやうにいはず、たゞ善悪にかゝらず、人情にしたがふをよしとして、人にもさやうに教ゆるかと思ふ人あるべけれど、さにはあらず。

右にいふごとく教誡の道にあらざる故に、人にそれを教ゆるといふ事にはあらず。

教誡の心をはなれて見るべし。

人情にしたがふとて、己おのが思ふまゝにおこなふとはならず、たゞ人情の有りのまゝを書きしるして、見る人に人の情はかくのごとき物ぞといふ事をしらす也。

是れ物の哀れをしらす也。

さてその人の情のやうをみて、それにしたがふをよしとす。

是れ物の哀れをしるといふ物なり。

人の哀れなる事を見ては哀れと思ひ、人のよろこぶを聞きては共によるこぶ、是れすははち人情にかなふ也。物の哀れをしる也。

人情にかなはず物の哀れをしらぬ人は、人のかなしみを見ても何とも思はず、人のうれへを聞きても何とも思はぬもの也。

かやうの人をあしゝとし、かの物の哀れを見しる人をよしとする也。

たとへば物語の中に、いたりてあはれなる事のあらんに、かたはらなる人これを見聞きて、一人はそれに感じてあはれに思ひ、一人は



何とも思はずあらん。その感じて哀れがる人が人情にかなひて物の哀れをしる人也。何とも思はぬ人が人情にかなはずあしき人也。されば其の物語を今よむ人も、その哀れなる事を見て哀れと思ふは、人情にかなふ人也。何とも思はぬは物の哀れをしらぬ人也。こゝにおきてかの物語の中の一人、物の哀れをしる人をよしといひ、物の哀れをしらぬ一人をあしゝとするをみて、かのよむ人の物の哀れをしらぬも、己が<sup>おの</sup>あしきをしりて、自然と物のあはれをしるやうになる也。これすなはち物語は、物の哀れを書きしるしてよむ人に物の哀れをしらすといふ物也。されば物語は教誡の書にはあらねども、しひて教誡といはゞ、儒仏のいはゆる教誡にはあらで、物の哀れをしれと教ゆる教誡といふべし。

上の引用では「人情」と「もののあはれ」が区別されないふうであるが、本論考の《本居宣長の漢才批判から「人情」を採る》は、「人情」に「もののあはれ」は考えない。

「もののあはれ」は、「はかなさ・むなしさ」が根底になっている情趣である。

「はかなさ・むなしさ」の側から「もの」を見れば、それは「あはれ」となる。これが、「もののあはれ」である。

したがって、「栄華」も「もののあはれ」となる。

——この文学に『源氏物語』がある。

「もののあはれ」の「はかなさ・むなしさ」は、仏教の思想である。仏教・儒教のものの考えを「漢才」と括るなら、「もののあはれ」も漢才ということになる。

特に、「もののあはれ」と「やまとたましひ」とは、一方を唱えれば他方を却ける関係にある。

これが示すように、古人の情趣に「日本型」を求めようとするのは、間違いである。

そして「日本型」は、そもそも文化のカテゴリライズに用いるようなことばではない。

どんなことばか？

人を煽動することばである。

これを使う場面は、政治・経済であり、とりわけ教育である。

## 2 漢才批判を数学教育に適用すると

### 2.0 要旨

### 2.1 学校数学への適用は、不可

### 2.2 数学そのものへ

### 2.3 数学の勉強

## 2.0 要旨

漢才批判の適用が具体的にどうなるかを示すために、数学教育をとりあげる。

漢才批判の適用対象は、学校数学になる。

現前の学校数学は、「数学的」の陶冶とされている。

数学を「数学的」に転じるこの考え方は、漢才である。

そこで、数学教育への漢才批判の適用は、「数学的」批判である。

この批判は、つぎを立てることになる：

「数学的」から「数学」へ（「数学で」から「数学を」へ）

ただしこれは、「学校数学のソリューション」の立てたわけではない。

学校数学のソリューションは、系ダイナミクスソリューションであり、それは「数学的」の方になる。

「数学的」が学校数学のソリューションであることは、揺るがない。

漢才批判の適用は、学校数学のソリューションを導くものではなく、「数学教育」は学校数学のことではない》を確認するだけのものである。

そして、「学校数学への拘りを捨て、数学そのものへ」が、この場合の数学教育の実践形になるということである。

## 2.1 学校数学への適用は、不可

2.1.1 適用：「数学的から数学へ」

2.1.2 要件：教員の側の「数学の情」陶冶

2.1.3 学校数学は、「数学的」がソリューション

### 2.1.1 適用：「数学的から数学へ」

本居宣長『源氏物語玉の小櫛』一の巻

此物語のおほむね、むかしより、説どもあれども、みな物語といふものこのころばへを、たづねずして、たゞよのつねの**儒佛などの書のおもむきをもて**、論ぜられたるは、作りぬしの本意にあらず、たまたまかの儒佛などの書と、おのづからは似たるころ、合へる趣もあれども、そをとらへて、すべてをいふべきにはあらず、大かたの趣は、かのたぐひとは、いたく異なるものにて、すべて物語は、又別に物がたりの一つの趣のあることにして、はじめにもいさゝかいへるがごとし、

小林秀雄 (1977), 新潮文庫版 上, p.204

「源氏」という物に、仮りに心が在ったとしても、時代により人により、様々に批評され評価されることなど、一向気に掛けはしまい。だが、凡そ文芸作品という一種の生き物の常として、あらゆる読者に、生きた感受性を以て迎えられたいとは、いつも求めて止まぬものであろう。

一般論による論議からは、いつの間にか身をかわしているし、**学究的な分析**に料理されて、死物と化する事も、執拗に拒んでいるのである。

「物語」「源氏」に、「数学」を代入する。

「儒佛などの書のおもむき」「学究的な分析」を、「数学教育学」と読む。

数学教育学は、どのように数学を死物化しているか。

「数学」を、「考え方」「問題解決能力」「リテラシー」の陶冶材と定めて、死物化する。

小林秀雄 (1977), 新潮文庫版 上, p.206

研究者達は、作品感受の門を、素速く潜って了解すれば、作品理解の為の、歴史的社会的心理学的等々の、しこたま抱え込んだ補助概念の整理という別の出口から出て行ってう。

それを思ってみると、言ってみれば、詞花を翫ぶ感性の門から入り、知性の限りを尽して、又同じ門から出て来る宣長の姿が、おのづから浮び上って来る。

出て来た時の彼の自信に満ちた感慨が、「物語といふもののおもむきをばたづね」て、「物のあはれといふことに、心のつきたる人のなきは、いかにぞや」(玉のをぐし、一の巻)という言葉となる。

マンガを読むのは、「マンガ的」を求めるためではない。

おもしろいから読むのである。

おもしろくないものは、読むのをやめる。

それだけである。

「数学的」を退けて数学を立てるとは、この「マンガ」を「数学」に置き換えるということである。

数学を勉強するのは、おもしろいから勉強するのである。

おもしろくなければ、勉強をやめる。

それだけのことである。

## 引用文献

小林秀雄 (1977) : 『本居宣長』, 新潮社.  
『本居宣長』(上下巻), 新潮文庫, 1992.

2.1.2 要件 : 教員の側の「数学の情」<sup>ココロ</sup> 陶冶

本居宣長 『源氏物語玉の小櫛』一の巻

手習とは、心にうかぶ事を、何となくかきすさ<sup>△</sup>ふをいふ、  
さて此、何事にまれいみしと思ふことの、心にこめて過しがたきす  
ぢは、今の世の、何の深き心もなき、大かたの人にてても、同じこと  
にて、たとへば世にめづらしくあやしき事などを、見聞たる時は、  
わが身にかゝらぬ事にてだに、心のうちに、あやしきことかな、め  
づらしき事かなと、思ひてのみはやみがたくて、かならずはやく人  
にかたりきかせまほしく思ふもの也、  
さるはかたりきかせたりとて、我にも人にも、何のやくもなけれど  
も、然すれば、おのづから心のはるゝは、人の情<sup>ココロ</sup>のおのづからの事  
にて、歌といふ物のよまるゝもこれ也

「数学教師 / 数学教育学者」は、「人の情のおのづからの事」としての「数  
学」がわからねば、本来務まらないものである。

翻って、数学教師 / 数学教育学者は、これをわかるための修行を負う者  
である。

修行は、「数学書を読み、心を数学になし、そして(下手でも)自ら数  
学をつくる」である。

本居宣長 『源氏物語玉の小櫛』二の巻

さて此物語をつねによみて、心を物語の中の人々の世の中になして、  
歌よむときは、おのづから古へのみやびやかなる情<sup>ココロ</sup>のうつりて、俗<sup>ヨソ</sup>

の人の情とは、はるかにまさりて、同じき月花を見たる趣も、こよなくあはれ深かるべし、

さるを近き世の人は、古への歌をまねぶとはすれど、古へ人の世ノ中をしらず、その情にうとくして、たゞおのが今の心にまかせて、よむ故に、古へにたがひて、鄙しげなることのみ、おほくいでくるぞかし

本居宣長『古事記伝』一の巻、「古記典等総論」

唯いく度も古語を考へ明らめて古へのてぶりをよく知ルこそ、<sup>アキ</sup>学問の要とは有ルべかりけれ。

凡て人のありさま心ばへは、<sup>モノイヒ</sup>言語のさまもて、おしはからるゝ物にしあれば、上ッ代の萬ッの事も、そのかみの言語をよく明らめさとりてこそ、知ルべき物なりけれ。

### 2.1.3 学校数学は、「数学的」がソリューション

数学教育 / 数学教育学への〈本居宣長〉の応用は、『「数学的」を退け数学を立てる』になる。

数学を勉強するのは、おもしろいから勉強するのである。

渡世の要件充足のためではない。

しかしこの事実は、数学教育 / 数学教育学には入っていない。

入っていないのは、これが社会にとって不都合なことだからである。

国は、国民の能力として、数学の素養を必要とする。

数学教育 / 数学教育学関係者は、己の生業のために、数学学習者を必要とする。

数学学習者の都合をいえば、数学教育 / 数学教育学の当事者がこのことにどの程度自覚的になれるかが、問題になる。そして、自覚できている者が数学学習者に対しどの程度正直になれるかが、問題になる。

現前は、自覚さえも無いというものである。

「数学的」のことばで自分で自分を騙してしまう者が大勢である。

しかし、生態学的には、これが合理——〈然るべし〉——なのである。

これが、社会の都合の形だからである。

系は、系が求める形を現すのである。

## 2.2 数学そのものへ

### 2.2.1 「学校数学」への拘りを捨てる

### 2.2.2 <おもしろい>

### 2.2.3 数学そのもの

### 2.2.4 「わかる数学」

## 2.2.1 「学校数学」への拘りを捨てる

学校数学において、数学は死物化する。

学校数学は、数学のためのものではなく、数学教員と数学教育学者のためのものだからである。

数学は、彼らに扱えるものに変えられねばならない。

例えば「かけ算割り算は数直線で」のようなことになるのは、これが数学教員・数学教育学者の納得する「数の乗除法」だからである。

「数学教育」を考える者は、これを「学校数学」で考えてしまう。

「学校数学」で考えてしまうのは、「学校数学」へのこだわりがそうさせる。

「学校数学」にこだわるのは、自分がこれで生業を立てている者だからである。

「学校数学」へのこだわりは、我執である。

したがって、「数学そのものへ」を立てる者は、自由人だということになる。

人間の歴史のなかに幾度も現れてきた「教会对自由人」の対立図式が、「数学教育」にも現れてくる。

宣長の《漢才 - 対 - もののあはれをしる》の含蓄は、ここにまで至る。

## 2.2.2 &lt;おもしろい&gt;

本居宣長『源氏物語玉の小櫛』一の巻

すべて世にあらゆる、見る物きく物ふるゝ事の、さまざまにつけて、うれしとも、おかしとも、あやしとも、をかしとも、おそろしとも、うれたしとも、うしとも、かなしとも、ふかく感ぜられて、いみしと思ふ事は、心のうちにこめてのみは、過しがたくて、かならず人にもかたり、又物にかきあらはしても、見せまほしくおもはるゝものにて、然すれば、こよなく心のさはやぐを、それを聞見る人の、げにと感ずれば、いよいよさはやぐわざなり、

これが、「数学を書く」の意味になる。

「数学がおもしろい」は、作者が書き表そうとした「うれし・おかし・あやし・をかし・おそろし・うれたし・うし・かなし」の事どもが、自分の中に伝わってくる状態である。

数学の「書く」は、マンガの「書く」と同じである。

数学の「おもしろい」は、マンガの「おもしろい」と同じである。

## 2.2.3 数学そのもの

本居宣長『古事記伝』一の巻、「訓法の事」

かにかくにこの漢の習氣<sup>ナラヒ</sup>を洗<sup>スツ</sup>ひ去るぞ、古学<sup>イニシヘマナビ</sup>の務には有<sup>ツトメ</sup>りける。

……

語にかゝはらず、義理<sup>コトワリ</sup>をのみ旨とするは、異国<sup>アダシクニ</sup>の儒佛<sup>ヲシヘゴト</sup>などの、教戒<sup>ヲシヘ</sup>の書こそさもあらめ、大御国の古書<sup>シカ</sup>は、然<sup>シカ</sup>人の教戒<sup>ヲシヘ</sup>をかきあらはし、はた物の理<sup>コトワリ</sup>などを論<sup>アゲツラ</sup>へることなどは、つゆばかりもなくてたゞ古へを記せる語の外には、何<sup>コトバ</sup>の隠<sup>ナニ</sup>れたる意<sup>ココロ</sup>をも理<sup>コトワリ</sup>をも、こめたるものにあらず。

……

唯<sup>モノ</sup>いく度も古語<sup>マナビ</sup>を考へ明<sup>ムネ</sup>らめて古へ<sup>モノ</sup>のてぶりをよく知<sup>ル</sup>こそ、学問<sup>モノ</sup>の要<sup>ムネ</sup>とは有<sup>ル</sup>べかりけれ。

ここで、つぎの読み換えをする：

「漢の習気」「異国の儒佛など」→「学校数学」

「古」→「数学」

「語にかゝはらず、義理をのみ旨とする」は、学校数学の唱える「数学的○○」がこれにあたる。

そして、「唯いく度も数学という言葉<sup>モノ</sup>を考へ明<sup>ムネ</sup>らめて、数学<sup>モノ</sup>のてぶりをよく知る」が、「数学の勉強の要諦」である。



## 2.2.4 「わかる数学」

小林秀雄 (1977), 新潮文庫版 上, pp.252,253.

彼のこのような、現実派或は実際家たる面目は、早くから現れて、彼の仕事を貫いているのであって、その点で、「古事記伝」も殆ど完成した頃に、「古今集遠鏡」が成った事も、注目すべき事である。

……

宣長は、「古今」に限らず、昔の家集の在来の註解書に不満を感じていた。

なるほど註釈は進歩したが、それは歌の情趣の知的理解の進歩に見合っているに過ぎない。歌の鑑賞者等は、「物のあぢはひを、甘しからしと、人のかたるを聞」き、それで歌が解ったと言っているようなものだ。

この、人のあまり気附かぬ弊風を破る為には、思い切った処置を取らねばならぬ。

歌の説明を精しくする道を捨てて、歌をよく見る道を教えねばならぬ。

而も、どうしたらよく見る事が出来るかなどという説明も、有害無益ならば、直かに「遠めがね」を、読者に与えて、歌を見て貰う事にする。

歌を説かず、歌を訳すのである。

……

このような仕事に、「うひ学び」の為、「ものよみしらぬわらはべ」の為に、大学者が円熟した学才を傾けたのは、まことに面白い事だ。

「わかる数学」のテキストづくりである。

### 引用文献

小林秀雄 (1977): 『本居宣長』, 新潮社.  
『本居宣長』(上下巻), 新潮文庫, 1992.

「本居宣長」が示してくる「数学教育」は、「数学の勉強のしかた」「わ

## 2.3 数学の勉強

### 2.3.1 勉強の普遍形

### 2.3.2 数学が現れる所

### 2.3.3 流しと拘り

### 2.3.4 数学のこころ

### 2.3.1 勉強の普遍形

数学の勉強の形は、改めて本居宣長にきくまでもないことである。  
ただ、ここは「本居宣長を適用」が趣向であるから、

《勉強の形は、分野が違って同じ》

の確認として、本居宣長を引いてみる。

### 2.3.2 数学が現れる所

数学の授業を受ける生徒は、何を授業されているのかさっぱりわからない。

教師が、学習主題が「何ものなのか・ナンボのものなのか」を教えないからである。

教師が「何ものなのか・ナンボのものなのか」を教えないのは、教えねばならないのはこのことだということを知らないからである。

知らないのは、自分が受けてきた授業も、自分がいまやっている授業と同じだったからである。

「何ものなのか・ナンボのものなのか」を示すものは、その数学が現れる所である。

その所は？

物理が説かれる所である。

「自然という書物は数学の言語で書かれている」は、ガリレオの言である。

数学は、自然という書物の中にあるものである。

数学が現れる所は、自然という書物である。

そこで、数学の授業は、自然という書物を読む授業である。

現前の数学の授業には、自然がない。

文字だけが浮遊しているのである。

こんなんでも数学の教授 / 学習が成るわけがない。

《自然という書物が数学の言語で書かれているので、自然をわかるため

に数学を勉強する》——数学の勉強とは、このようなものである。

本居宣長は、<sup>いにしえ</sup>古という書物が<sup>ふること</sup>古言で書かれているので、古をわかるために古言を勉強する者である。

よって、本居宣長が説く「勉強」は、数学の勉強と同型になる。

本居宣長『宇比山踏』

語釈とは、もろもろの言の、然云ッ本の意を考へて、<sup>トフ</sup>釈をいふ、  
 …… 此は学者の、たれもまづしらまほしがることなれども、これにさのみ深く心をもちふべきにはあらず、…… 此は大かたよき考へは出来がたきものにて、まづはいかなることとも、しりがたきわざなるが、しひてしらでも、事かくことなく、しりてもさのみ益なし、  
 されば諸の言は、その然云ッ本の意を考へんよりは、**古人の用ひたる所**をよく考へて、<sup>シカジカ</sup>云々の言は、云々の意に用ひたりといふことを、よく明らめ知るを、要とすべし、  
 言の用ひたる意をしらでは、其所の文意聞えがたく、又みづから物を書ッにも、言の用ひやうたがふこと也、  
 然るを今の世古学の輩、ひたすら然云ッ本の意をしらんことをのみ心がけて、用る意をば、なほざりにする故に、書をも解し誤り、みづからの歌文も、言の意用ひざまたがひて、あらぬひがこと多きぞかし、

### 2.3.3 流しと拘り

本居宣長『うひやまぶみ宇比山踏』

文義の心得がたきところを、はじめより、一々に解せんとしては、とどこほりて、すゝまぬ ことあれば、聞えぬところは、まづそのまゝにて過すぞよき、

殊に世に難き事にしたるふしぶしを、まづしらんとするは、いといとわろし、

たゞよく聞えたる所に、心をつけて、深く味ふべき也、

こはよく聞えたる事也と思ひて、なほざりに見過せば、すべてこまかなる意味もしられず、又おほく心得たがひの有て、いつまでも、其誤りをえさとらざる事有也

「よく聞えたる所」は、「要所」に他ならない。

「心得がたきところをそのまゝにて過す」は、「要所」に関してはうまくいかない。

「深く味ふべき」となるわけである。

「深く味ふべき」には、「じづら字面ではないぜ」が含まれている。

例えば、数学の用語は定義されているが、定義は、この意図・本意が何であるかをわかってはじめて、「わかった」となるのである。

### 2.3.4 数学のころ

数学を勉強することは、数学のころがわかり、数学のころになってみることである。

本居宣長『古事記伝』一の巻、「あげつら書紀の論ひ」

カラフミゴコロ漢籍心を清く洗サリひ去てよく思へば、天地はただ天地、メオ男女はただ男女、ヒミツ火水はただ火水アルカタチんて、おのおのその性質情状はあれども、そはクスシみな神の御所ミシワザ為にして、然るゆゑのことわりは、いともいとも奇靈タヘく微妙なる物にしあれば、さらに人のよく測知ハカリシルべききにはあらず。

然るを漢国人の癖として、己がさかしら心をもて、萬の理をシヒ強て考へ求めて、此ノ陰陽といふ名を作り設けて、天地万物みな、此理の外なきが如く説トキなせるものなり。

本居宣長はこのように言うが、「数学のころ」は「もののあはれをしる」にあり、かつ「萬の理を強て考へ求める」にある。

本居宣長は、萬の理を強て考へ求める心を「己がさかしら心」に含めてしまう。

そこで、科学に蓋をする格好になる。

これは、学術に蓋をすることになるから、自家撞着になる。

漢才批判のこの部分トキは、宣長のしくじりである。

要点は、「萬の理を強て考へ求める」には、「もののあはれをしる」と「己がさかしら心」の二つの様相がある（入り混じる）、ということである。

数学の「もののはれをしる」は、「ものがく自己組織化する系」であることをしる」である。

「奇霊く微妙なる」は、自己組織化のダイナミクスの「奇霊く微妙なる」である。

なぜこう言えるか？

数学が科学の言語であるわけを、考えてみよ。

科学は、自然をく自己組織化する系——「自動機械」——に解釈する営みである。

そこで、「自動」の記述に適う言語は？となる。

そして、数学だ！となる。

「自動」と「計算」が対応するわけである。

### 3 「日本型」を却ける法

3.0 要旨

3.1 「型」の意味を識る

3.2 「唯名」を識る

3.3 「存在の階層」を識る

3.4 「進化」を識る

3.5 「個」を識る

## 3.0 要旨

「日本型」が幻想であることは、まともに考えればわかることである。

「日本型」の考えをもつのは、まともに考えないからである。

まともに考えないのは、まともに考えることを無意識に抑圧しているからである。

まともに考えることを無意識に抑圧しているのは、まともに考えると「日本型」が立たないことを無意識に知っているからである。

「日本型」が立ってくれないと困るわけである。

なぜ、「日本型」が立ってくれないと困るのか。

「日本型」の課題を立ててしまったからである。

課題「日本型」のソリューションは、「日本型」を求める構えの先にはない。

ソリューションは、メタ・ソリューションがこれの形になる。

即ち、「日本型」幻想の払拭、課題「日本型」の棄却、である。

ここでは、「日本型」が幻想であることを見てとる視座として、「系と型（存在と形式）」「唯名」「存在の階層」「進化」「個」を取り上げる。

## 3.1 「型」の意味を識る

### 3.1.1 系と型——存在と形式

### 3.1.2 比較：「日本発」

### 3.1.1 系と型——存在と形式

系として「日本」を立てる。これは可能である。

この「日本」に対し、「日本型」を立てる。これは不可能である。

「系」と「型」の関係は、「存在と形式」である。

存在には、形式を措定できるものとできないものがある。

形式は、論理概念である。

したがって、形式をもつ存在は、論理的存在である。

形式が論理的存在であるとは、簡単に言うと、ことばになるということである。

これより、形式をもつ存在は、ことばになる。

これの対偶をとる：

《ことばにならない存在は、形式をもてない》

系「日本」は、ことばにならない。

よって、「日本型」は立たない。

形式をもつ存在では、存在は形式の外延で、存在の内包が形式である。

「外延・内包」の論理に慣らされた者は、どんな系にも型を最初から当て込む者になる。

数学は、「外延・内包」の論理が貫徹される場所である。

数学に親しむ者は、よくよく吟味・自戒すべし。

### 3.1.2 比較：「日本発」

「お国柄」ということばがある。

事物「○○」が、国/地域によって様々な形をとるというわけである。

さてこの場合、どんな「○○」と国/地域の組み合わせが、「お国柄」になれるのか。

このような問いを立てるのは、「日本の思想」のようなことばを見るからである。

「お国柄」は、「○○」と国/地域が小さなカテゴリーだと有効な概念になる。しかし、「思想」と「日本」のような大きなカテゴリーにまで拡げると、概念の有効性があやしくなる。

ひとは、物事を因果で考える癖がある。

「日本の思想」の主題を立てる者は、「日本人の心」を措定する者になる。

因果で考える癖は、ことばの影響である。

ことばの習得は、内包と外延の相互フィードバックの習得である。

そしてこのとき、内包が因に、外延が果になるわけである。

原因溯行は、さらに「日本人の心の源」の考えに進む。

考えは、奇っ怪・荒唐無稽の度を増していく。

ひとが癖にしている因果の考えは、間違いである。

ひとは因果を1対1の格好で考えてしまう。

しかし、事物の変化は、ミクロな因果が複雑に複合した現象である。



1対1の因果の形にまとめられるものではない。

では、「日本の」は、どんなふうに使えばよいことばなのか？

「日本発」である。

対して、「日本型」を立てると、おかしくなる。

「日本人の心」のように、無いものを立ててしまうことになる。

「日本型」は、幻想である。

幻想かそうでないかの議論を今から開始するような主題ではない。

「日本型」を主題化する形は、

《だれがどんなとき「日本型」を立てたくなるのか？》

である。

## 3.2 「唯名」を識る

### 3.2.1 ことばに騙される

### 3.2.2 「文化」

### 3.2.3 「俗」

### 3.2.1 ことばに騙される

ことば「○○」を使うことは、存在「○○」を立てることである。  
ひとは、ことばを用いることで、存在を先取する。

この存在指定は、錯覚である。

実際、名詞の指す存在を求めれば、存在がわからなくなる。

ひとは、ことばを使って、ことばに騙されるのである。

### 3.2.2 「文化」

外来仕様に対し「外来文化」のことばを立てると、反対語として「独自文化」が立つ。

「郷土文化」「地方文化」「日本文化」は、これである。

### 3.2.3 「俗」

「日本型」は、「日本発」との対比で考えるべし。  
日本の先端技術は、「日本発」であり、「日本型」と呼ぶものではない。  
「日本型」と呼ぶときは、＜マス mass＞が想われている。

実際、「日本型」をしぜんに想うのは、＜俗＞である。  
逆に、＜俗＞に対して「日本型」を言えないようでは、「日本型」の立論に望みはない。

では、＜俗＞に対し「日本型」を想うとき、＜俗＞として何を見ているのか？

実に、これが問題である。  
＜俗＞の意味は、自明ではない。

小林秀雄 (1977), 新潮文庫版 上, pp.123-125

仁齋によって、大胆に打出された考え、

「卑ケレバ則チ自ラ実ナリ、高ケレバ必ズ虚ナリ、  
故ニ学問ハ卑近ヲ厭フコトナシ。  
卑近ヲ忽ニスル者ハ、道ヲ識ル者ニ非ザルナリ」  
(童子問』上)

「人ノ外ニ道ナシ」、或は進んで「俗ノ外ニ道ナシ」とまで言う「童子問」を一貫したこの考えは、徂徠によってしっかりと受止められて、徹底化された。

……

宣長は、…… 徂徠の見解の、言わば最後の一つ手前のものまでは、悉く採ってこれをわが物とした。という事は、最後のものは、徂徠自身の信念であり、自分のものではない事を、はっきり知っていたという事であろう。…… 徂徠という豪傑の姿は、徂徠とは全く別途を行った宣長に、却って直かに映じていた、と想像してみてもいいように思う。

……

卑近なるもの、人間らしいもの、俗なるものに、道を求めなければならぬとは、宣長にとっては、安心のいく、尤もな考え方ではなかった。俗なるものは、自分にとっては、現実とは何かと問われている事であった。

「日本文化」を言う者は、たいていこの根本的問いに思考停止している。そして「日本型」と「日本発」を一緒にしてしまうみたいになるわけである。

さて、＜俗＞は、「意味が自明でないもの」ではない。  
＜俗＞は、幻想である。

#### 引用文献

小林秀雄 (1977): 『本居宣長』, 新潮社.  
『本居宣長』(上下巻), 新潮文庫, 1992.

### 3.3 「存在の階層」を識る

#### 3.3.1 事物が見える距離——マクロ度

#### 3.3.2 「色即是空 空即是色」

#### 3.3.1 事物が見える距離——マクロ度

岩は、離れて見て岩になる。

山は、遠くに望んで、山になる。

地球は、万 km の単位で離れて見て、やっとその「球」が見える。

事物には、それが見える距離というものがある。

言い換えると、マクロ度がある。

さて、「日本型」のマクロ度は？

そもそも、マクロ度の調節で見えてくるものなのか。

見えてこなければ、幻想だということである。

### 3.3.2 「色即是空 空即是色」

物事は、仔細に見ようとする、見えなくなる。  
仔細に見ないようにすると、見えてくる。  
存在のこの性質を、「色即是空 空即是色」と謂う。  
存在は、雲のようなものである。

「雲のようなもの」は、幻想とは違う。  
「日本型」は、「雲のようなもの」ではなく、端的に幻想である。  
「日本型」が幻想であることを理解するためには、「雲のようなもの」を理解することが必要である。

## 3.4 「進化」を識る

### 3.4.1 「進化」の概念

### 3.4.2 「古人」は存在しない

### 3.4.1 「進化」の概念

物事は、自己組織化する系である。

自己組織化を、「進化」と呼ぶ。

物事は、進化する系である。

日本は、進化する系である。

「日本型」を立てるとは、進化する系に型を立てようとする事である。

これは、時空4次元に型を立てようとする事である。

趣として、共時の型を断面とする通時直方的な型を立てるといふようになる。

これは、不可能である。

「共時の型」の段階で、既に不可能である。

では、「型」を「原点」の意味で考えるといふのはどうか。——「日本の原点」といふふうになる。

これもやはりだめである。

進化する系は、「溯行」の概念が立たない。

進化は「生成」とは違ふのである。

物事には、元は無い。

物事は、いろんな物の着いたり離れたりである。

物事の溯行は、要素が収束するのではなく、要素が拡散する。

川の遡行は無数の源へと拡散することになるが、これと同じことである。

### 3.4.2 「<sup>いにしえびと</sup>古人」は存在しない

「日本型」を想う者は、現前に「日本型」の衰滅を見る者である。

翻って、「日本型」を体現していた<sup>いにしえびと</sup>「古人」を想定することになる者である。

「古人」の発想は、古に一様な文化を求める発想である。

これは、妄想である。

一様な文化は、交通がこれを実現する。

過去に溯ることは、交通技術の貧しい時代に溯ることである。

これは、一様の度合いが増す方向ではなく、多様の度合いが増す方向である。

実際、「古人」を立てられないことは、日本歴史のなかの

「狩猟採集文化を、後から来た農耕文化が駆逐」

を考えれば、直ちにわかることである。

「古人」を立てることは、農耕種族を「古人」に仕立てることであり、その文化を一つのものに想念して「やまと」を仕立てることになる。

鬼伝説の鬼は、農耕種族が山に追いやった民である。

農耕民にとって彼らは、何をしてくるかわからない怪しい存在になる。

そしてこの「怪しい存在」は、時代が降り、「サンカ」や「部落」になるというわけである。

ちなみに、「もののあはれ」から「やまとたましひ」<sup>スメラオホミクニ</sup>「皇大御国」へと進

んでしまう本居宣長は、当時の歴史学・民俗学・人類学（比較文化学）の限界（歴史的限界）ということになる。

翻って、これらの知識を持ってしまった現代人は、「古人」を立てられない——特に「日本型」を立てられない——わけである。

## 3.5 「個」を識る

### 3.5.1 個別性

### 3.5.2 成長

### 3.5.3 人物考：「空海」

### 3.5.1 個別性

「日本型」は、個の多様性を見るときは、言えないものになる。  
翻って、「日本型」が言い出されるときは、個の多様性を見ないようにしている。

個を限定して「日本の」を言いたいとき、その「日本の」は「日本発」である。  
「日本型」の間違ひは、「日本発」を「日本型」と言ってしまうところである。

### 3.5.2 成長

異文化が先進文化として入ってくる。  
「先進」の思想は、後進の者の目には「合理主義」に映る。  
そこで、この文化への反発は、「反合理主義」がこれの形になる。

若いときは、先進文化になびく。  
リアクションが「反発」であっても、反発の形をその先進文化からもらう。  
すなわち、その文化の一部になっているカウンターを用いる。

成長するにつれ、考え方が変わる。  
「成長」の内容は、「経験値が高まる」である。  
「日本型」が言い出されるときは、ほぼこのレベルの「反合理主義」を指している。

翻って、「日本型」は、合理主義のフィールドや若年のフィールドに求めるものではない。  
「合理主義のフィールド」「若年のフィールド」とは？  
例えば、現前の学会は、これになる。



### 3.5.3 人物考：「空海」

「日本型」は、「個」にも求め得ない。

個は成長し変化するからである。

若い時は、進歩主義になる。

外来文化が「進歩」を現している状況では、排外主義になる。

やがて、進歩主義に厭きていく。

そして、己の足下——「自然」——に目がいくようになる。

『十住心論』を著した空海は、若い空海である。

若いときは、理論の体系化を目指す。

年をとると、教学がことばの遊びに過ぎないことが見えてくる。

そして、原点回帰の思いになる。

空海の場合は、山に戻る。——東寺を辞し高野山に入る。

## 4 備考：「日本型」が言い出されるとき

### 4.0 要旨

### 4.1 「進歩」

### 4.2 「日本型」を立てて反発

### 4.3 「日本型」の言論スタイル

## 4.0 要旨

「日本型」は、《「日本型」を言ってもだいじょうぶ》の気持ちがこれを言わせる。この《「日本型」を言ってもだいじょうぶ》は、勘である。

「日本型」の大風呂敷を拡げさせるものは、＜勢い＞である。  
この勢いのまま「日本型」の論考に進む。

勘は外れである。

勢いは萎え、論考はうやむやで立ち消えとなる。

しかし、まったく無駄をやってしまうわけではない。  
副産物のかたちで収穫がある。

翻って、副産物を見込んで「日本型」を確信犯的に言うのも、ありである。

かくして、＜「日本型」を唱える＞には、つぎの3つの相がある：

- ・ 一途に思い込む
- ・ 外したことをわかっているが、引っ込みがつかない
- ・ 確信犯

## 4.1 「進歩」

### 4.1.1 拝外

### 4.1.2 細工

### 4.1.1 拝外

先進文化が外からやってくる。

外来仕様に熱中する。

これを「進歩」にする。

拝外が、進歩主義の形になる。

日本の「外」は、中国が長らく続き、大航海時代になって欧米に移る。

日本は、漢風<sup>から</sup>を取込み、欧米風を取込むということをやってきた。

日本の進歩主義は、かつて拝漢主義、そして文明開化以降、ずっと拝欧米主義である。

### 4.1.2 細工

異文化移入の文化は、移入文化の細工・修飾が独自性を発揮する形になる。

異文化移入を習い性<sup>こ</sup>にしている文化は、本質論 / 原理論を自分の守備領域外にする。

代わりに、所与<sup>こ</sup>を捏ねくり回すことに巧みになる。

瑣末な概念枠組<sup>こ</sup>をつくり込むことや、フィグヤー（形象）づくりに熱中し、これの技術を高めるといふようになる。

この文化では、通時性が共時性にされ、奥行きがつぶされる。

表層的（「平板的で薄っぺらい」）になる。

総じて、骨太に対し骨細——「律儀・緻密」——を特徴とする文化になる。

そしてこれが「進歩」の意味になる。

実際、日本の学術は、これをパラダイムにしてやってきた。

## 4.2 「日本型」を立てて反発

### 4.2.1 拝外的進歩主義に苛立つ

### 4.2.2 「日本型」を、わざと言う

### 4.2.1 拝外的進歩主義に苛立つ

拝外的な進歩主義は、保守的な思想傾向の者や、原理主義的な思想傾向の者を苛つかせるものになる。

学界では、拝外的進歩主義を揶揄することばとして、かつて「横のものを縦にする」というのがあった。

「横」は、横書きの意味で、欧米テキスト。「縦」は、縦書きで、日本語テキスト。「ただの受け売り」というわけである。

## 4.2.2 「日本型」を、わざと言う

「日本型」のことばは、表現者がこれを使う。

その者は、「日本型」のことばをわざと使う者である。

「表現」は、「わざと嘘を言う」である。

「わざと嘘を言う」は、効用——副産物・発見——を考へてのことだとなる。

実際、「わざと嘘を言う」は、科学もこれをやる。

「仮説」「作業仮説」を立てるのが、それである。

「わざと嘘を言う」には、これをたのしんでいるところがある。

表現者は、おもしろい表現をつくりたくて表現行為をするのである。

効用の計算は、この〈おもしろい〉のうちである。

したがって、後から来て「日本型」探求の課題を立てる者は、「日本型」を真正直に受け取ると、ばかを見ることになる。

この課題を立てる者は、自ら表現者となり、この課題をおもしろがる——わざと嘘を言っておもしろがる——というのでなければならない。

## 4.3 「日本型」の言論スタイル

### 4.3.1 「和魂」

### 4.3.2 「人情」論

### 4.3.3 アニミズム

### 4.3.4 総合主義

### 4.3.1 「和魂」

異文化の攻勢を目の当たりにすると、ひとは自文化を保守したくなる。そして、異文化が「才」として攻勢をかけてくるとき、ひとはこれに対するのに「魂」を以てしようとする。——「和魂漢才」「和魂洋才」

ここで、「才」対「魂」の意趣は、「作為・欺瞞」対「素直・本当」である。

### 4.3.2 「人情」論

異文化が先進文化として入ってくる。

「先進」の意味は、「生活水準が高い」である。

生活水準の高さを実現しているのは、技術である。

そして技術の内容は、「事物の資源化」である。

この文化は、事物を「用不用」で考えるものになっている。

そこで、この文化への反発は、「用不用」の考え方の拒否を形にするものとなる。

「用不用」の考えは、人に対しても適用される。

「人材」観である。

そして「人材」は、「立派な人間」に表現される。

そこで「用不用」の考えの否定は、「立派な人間」の考えの否定になる。

「立派な人間」など嘘だ、となる。

そして、「人間の真実」を論じることに向かう。

「立派」を立てるのは、「善悪・倫理」の思想である。

「善悪・倫理」の思想は、「用不用」の考えに溯る。

「善悪・倫理」がすんなりからだに入る者がいる一方で、「善悪・倫理」を苦手とするタイプの者がいる。（→『倫理はウザイ』）

「善悪・倫理」に対する好悪は、人の個性に帰するのみである。

「善悪・倫理」を苦手とする者は、「善悪・倫理」を退けるのに、「人情」を以てする。

この実践行為を「文学」と謂う。

実際、文学の本質は、「善悪・倫理」へのアンチである。

### 4.3.3 アニミズム

存在に生命体を見る。

この思考形態をアニミズムという。

なぜ存在は生命体のように見えるか。

自己組織化する系だからである。

アニミズムは、〈自己組織化する系〉を〈生命体〉に短絡する思考形態である<sup>(註)</sup>。

〈自己組織化する系〉に生命体を見るとき、その生命体は「霊」とか「神」の顕現の趣きになる。

なぜなら、それは通常生命体とは違う不思議なものである。

生活が翻弄される存在に対しては、これの「支配」を感じる。

日々の生活に係わる存在に対しては、これの「御蔭」を思う。

このような存在は、「霊」「神」の身分になる。

自然に「霊・神」を想う者は、外国の合理主義の攻勢を感じる時、自国を「神の国」にする。

本居宣長の「皇大御國」はこれである。

そしてさらに生命体を重ねると、「國體」思想になるというわけである。

---

註：〈生命体〉は〈自己組織化する系〉であるが、〈自己組織化する系〉一般は〈生命体〉ではない。

〈自己組織化する系〉と〈生命体〉の区別を立てるのは、生物学



/ 科学である。

区別は、簡単なものである。

即ち、＜生命体＞の「自己組織化」には「自己増殖」（「生殖」）が含まれる。

#### 4.3.4 総合主義

存在は、入れ籠型の階層構造を現す。

よってアニミズムは、入れ籠型の生命体階層構造を導くものになる。  
《各生命体は、上位の生命体の胎内に生かされている》の絵図になる。

ここで最上位生命体を地球にとれば、ガイア理論である。

宇宙にとれば、真言密教の「胎蔵曼荼羅」である。——「宇宙」の仏格化が「大日如来」。

アニミズムは、＜自己組織化する系＞を＜生命体＞に短絡するものとして、科学の却けるところである。

一方、科学の方法論になる総合主義は、アニミズムと紙一重の差である。  
——＜自己組織化する系＞を＜生命体＞に短絡したら、アニミズム。

老荘思想の「天網恢恢疎にして漏らさず」は、総合主義と解される。  
つぎも総合主義と解されるが、表現はアニミズムである：

「寒暑・栄枯は、天地の呼吸なり。  
苦楽・栄辱は、人生の呼吸なり。  
即ち、世界の活物たる所以なり。」  
（佐藤一斎『言志壘録』）

日本の学術が欧米の物真似（「横のものを縦にする」）でやってきたことに反発する者は、「日本型」を考えたいくなる。

このとき「欧米」の内容を「人材」の考えに定めれば、「日本型」として「人

#### 4 備考：「日本型」が言い出されるとき

情」論を対置することになる。

内容を「実在論・分析主義・合理主義」の方法論に定めれば、「総合主義」を対置することになる。

しかし、「人情」「総合主義」ともに、「日本型」のラベルを貼ることはできない。

## 5 閉じ

### 5.1 おわりに

## 5.1 おわりに

ひとは、集団の中で生きる。

集団は、＜自己組織化する系＞のダイナミクスを現す。

このダイナミクスの内容として、個は規範で制御されるものになる。

規範は、「規範に従う者が良い者である」という趣きになる。

規範は、個に「進歩」の形を与える。

こうして、集団は個に対し「進歩主義」として立つ。

規範は、個を抑圧する。

抑圧される個は、自由を想う。

このときの自由は、進歩主義からの自由である。

——逆に、進歩主義は自由の抑圧になる。

学びは、自由な行為である。

したがって、集団は進歩主義の規範を以て、学びを制御することになる。

わかりやすい例が、「倫理行動規範」である。

ここに、この制御に馴染めない者、集団がおかしな学びの体に偏していることに不満をもつ者が、現れる。

この者は、進歩主義批判の論を立てたくなる。

進歩主義批判の論は、たいてい下手をしてしまう。

馬鹿なことを言うてしまうのである。

即ち、「大衆」とか「オリジナル」の類の、内容の無いことばを言うてしまう。

そこで、「進歩主義批判の定石」「進歩主義批判の作法」の考えをもつことが、だいじとなる。

本論考は、「作法」として

《「もののあはれ」を採り、「やまとたましひ」を却ける》

を示したものである。

論考は、本居宣長の漢才批判を引く形で、構成した。

この体裁にしたのは、本居宣長をPRしたい気持ちからである。

本居宣長の威を借りるためには、本居宣長のPRから始めねばならない。本居宣長については、いろいろと誤解・曲解——特にイデオロギー由来の誤解・曲解——が有るからである。

宮下英明 (みやした ひであき)

1949年、北海道生まれ。東京教育大学理学部数学科卒業。筑波大学博士課程数学研究科単位取得満期退学。理学修士。金沢大学教育学部助教授を経て北海道教育大学教育学部教授 (数学教育専門), 2015年退職。

註：本論考は、つぎのサイトで継続される (この進行に応じて本書を適宜更新する) :

<http://m-ac.jp/thought/counter/>

## 「進歩主義批判」作法

—— 本居宣長の漢才批判から ——

---

2018-07-04 初版アップロード (サーバー : m-ac.jp)

2018-07-23 更新

著者・サーバ運営者 宮下英明

サーバ m-ac.jp

---

<http://m-ac.jp/>

[m@m-ac.jp](mailto:m@m-ac.jp)

---

